

連れ子

との

ラッキー
スタベが

止まらないっ！

ADULTS ONLY

R18

成人向け

再婚したら、◎学生の息子ができた。

連れ子にアレコレ悪いことをする男も世の中にはいるみたいだが、断じて俺は違う。

まず俺は男に興味はない。まして、子どもには一片の興味もないのだ。

再婚相手の女性はグラマラスでスタイルも抜群で何より少し年上。美魔女だ。

美魔女って経済力のある旦那がいる女性の特権だと思っていたけれど、彼女はほんとうに天然の美人で、それなのに俺のような平々凡々な男を再婚相手に選んでくれて。

今の俺は最高に幸せだ。妻も息子も俺の手で必ず幸せにしてみせる。

などと、意気込んでいたのだが———何やら様子がおかしい。

チュッ♡ チュッ♡ チュッ♡ チュッ♡

可愛らしいリップ音といじらしい感触。

俺は思わず身体の上に乗ったその身体を抱き寄せる。

新婚というのはこれだから最高だ。

ああ、この吸い付くような肌、もちもちの腕……。

胸にすっぽりと収まる小さな身体は、無性に庇護欲を掻き立ててきて……、

ん？ 小さな身体……………？

パチリ。目を開けて驚愕した。

俺の上に乗って俺の唇を小鳥のように啄んでいるのは妻ではなく。

連れ子である、俺の新しい息子だったのだ……！

「幸助（こうすけ）……くん？」

「えへ♡ おはようお父さん♡」

母親に似た甘い笑顔と、先ほどまで俺にキスしていたであろう唇に釘付けになる。

ふわっふわだった……これが◎学生とのキスの感触……。

いや、いかんいかん。希少価値の高いシチュエーションに溺れるな。

それより今、どうして、こんな状況になっているんだ……？

「あの、今、俺にチュッチュッてしていたよね？　なんで……？」

「お母さんがいつも僕にしてくれるから♡ 親子ってこうするんでしょ？」

「あ、あー……？」

幸助くんが俺を父親だと認めてくれて嬉しい気持ちと。
この手のスキンシップをするにはもう育ちすぎだろうという違和感が俺の中で衝突する。
だが目の前の無邪気な笑顔を見たら何も言えない。
これはこの子の善意だ。そして俺への好意なのだ。
突然家の中に知らない男が入ってきて、嫌われたっておかしくないのに、こんなにも真っ直ぐ俺のことを見ている。
そう噛み締めると、だんだん幸福にすら思えてきた。
起き上がって頭を撫でる。
幸助くんの目尻が蕩ける様は、俺に全幅の信頼を置いているのが見て取れる。
新しい父親をキスで起こすなんて、無垢の証明じゃないか。
年頃になってから掘り返してやったら「黒歴史だ！」なんて怒り狂うかもしれない。
その時まで一緒に居られるように、俺は誠心誠意この母子に尽くそう。
今は小さなこの天使が、やがて悪魔のようになって、寄り添い続けよう。
今日、何気なくしたこの誓いが、ずっと俺をこの幸せな生活に縛り付けていてくれる気がした。

ショッピングモールは家族連れで賑わっている。
いい歳まで独身だった俺が、美しい妻と愛らしい息子連れてその仲間入りができているのは不思議な気分だ。
浮ついた気持ちで歩いていると、不意に妻が「あ！」と声を上げる。
「スマホ落とした！ さっきハンカチ出した時だ！」
「あら。インフォメーションセンターに届いているかな？」
「あ、私一人で行くから大丈夫。あなたは幸助を本屋に連れて行って。その子、読み始めると長いから」
「わかった」
幸助くんのそういうシーンは俺も何度か目にしている。
本を読むのが大好きで、子供向けの試し読みコーナーからなかなか離れようとしないのだ。
もちろんそれに付き合わされるのも慣れっこ。
駆けて行く母親を見送る幸助くんに、俺は優しく声をかけた。
「じゃあ先に本屋に行っていようか。お母さんすぐ来るよ」
「うんっ」

ギュッ

夕飯の後のひと時。

幸助くんがトイレに行ったことをきっかけに妻が切り出してくる。

「そういえば明日の朝、幸助、尿検査しないと」

「へー」

そうか、親になるとそんなこともしないといけないんだ。大変だなあ。

などと、すっかり他人事のように返事する俺に妻はご立腹だ。

「へーじゃないよ。あなたがやってあげてね？」

「え！」

「よくわかんないのよ、おチンチンの扱い。こういうのは男親のほうがスムーズじゃない？」

私がやるといつも暴発して大変なんだから」

確におチンチンの扱いは俺のほうでわかっている自信があるが……。

子どもの尿検査なんてやる機会がくると思わなかった。

しかもつい最近親子になったばかりなのに。俺が？　アリなのか？

「お父さん、お風呂一緒にはいろー！」

戻ってくるなり、幸助くんが元気に声をかけてくる。

二人分の着替えを俺に渡しながら「ほら、こんなに懐いてるんだし」と言外に目で訴えてくる妻に、俺は了承するしかなかった……。

「わー！　お父さんチンチンおっきー！」

「こ、幸助くん、あんまり見ないで……？」

今までは風呂に入れる際、さりげなくタオルで隠していたけれど……。

不意に見られてしまってなんだか盛り上がっている。

この子は早くから父親がいなかったみたいだし、大人のを見るのははじめてなんだろうな。

とはいえ、息子になったばかりの子に見られるのはさすがに恥ずかしい……。

「ほら、さっさと身体を洗いなさい」

「はーい」

泡のついたスポンジを渡してやる。

幸助くんは首からゴシゴシと擦り付けて、やがて下半身に辿り着いた。

途端にスポンジを放り出して、丁寧に両手でチンチンを泡で包む。

「ここ、しっかり洗いなさいって。尿検査でばい菌つかないように」

「そうなのか。ウン、大事なことだな」

「ゴシゴシ、ゴシゴシ」

小さな手が小さな竿を揉みしだくように洗っている……………。

凝視してしまい、慌ててかぶりを振った。

ダメだ。何を意識しているんだ、俺は。

起き抜けにキスをされたり、手を繋いだ時に優しく接してくれたり……………。

そのせいで、少しおかしくなっているんだよな。

幸助くんは妻によく似ている。俺の好みの顔や性格なんだから少しは致し方ない。

まあ男の子なんだし、ここからぐんと成長すればそういう見方もできなくなるだろう。

俺はあくまで美人で年上の女が好きなんだ。

今のこの状態はシチュエーションに酔っているにすぎない……………。

「あっ……………」

「どうした？」

静かな浴室に、ふと幸助くんの驚いた声が浮かび上がる。

彼が視線を落としている股座を覗くと、幸助くんの両手に包まれたそこが———。

「なんか、ピンピンになっちゃったよお……………？」

勃起して……………る？

あまりに小さくてうまく判別できないが、ウン、確かにしている。

手を添えなくてもピンと勃っているその様子に困惑する本人。

確かに、まだ自慰を知らなくても無理はないのか。

念入りに洗っていて、身体が反応しちゃったんだな。

「あ……♡ あれ……？ きもちいい……♡」

「お、オイ……！」

恍惚とした顔で竿を扱き始める幸助くん。

気恥ずかしさからすぐに腕を掴んで止めた。

「これは人前でしたらダメなことだ。一人の時にするんだ」

「そうなの？ でもなんだか怖いからお父さんの前でしたい」

「ええっ……………？」

そろそろ精通の時期なのかもしれない。

だけど俺が教えていいものか……………いや、父親が教えるしかないよな。

幸助くんもそれを望んでいる。確かにはじめての時は心細いものな。
だけど……………これ以上幸助くんの性的な顔を見たら、俺、自分でもどうなるかわからなくて怖いんだけど…………？

「アッそうだたんぱく！」

「たんぱく？」

「そう、実はこれってすごくエッチで恥ずかしいことなんだ。だけど、尿検査の前の日にこれをすると皆にバレちゃう」

「え……………それは、やだ……………」

「だろう？ だからやめておいたほうがいい。またおいおいな」

「じゃあお父さんもこれするの？」

ウゝッ。やぶへびだったな……………。

「まあ、する、かな…………？」

「見せて！ 正しいやり方覚えておきたい！」

「ええ、恥ずかしいよ…………」

「お願い！ お母さんには言わないから」

お母さんには言わないから。

その何気ないワードがなぜだか俺の中で魅惑的に膨らんでいく。

そうだ、これは男同士の秘密だ。女の人に理解できないことなんて山ほどある。

幸助くんはこれからますます成長する。そのために俺がいるんじゃないのか。

なぜだか俺の思考は幸助くんにおナニーを見せる方向にシフトして正当化した。

隠していたチンチンを露出させる。そして右手でゆっくりと、扱き始めた。

「わあ、やっぱり大きい…………」

「そんなことないよ、普通だよ…………」

「先っぽピクピクしてるね。きもちいいの？」

「まあ……………」

そんな熱心に覗き込まれると、なんだかすごくイケないことをしている気分だ…………。

大体、公衆の面前で全裸になっただけでも犯罪なのに、◎学生に自慰シーンを見せつけるなんていくら父親とはいえ許されていいのか！？

ああ、気が散って集中できない…………大体何をオカズにすればいいんだ。

妻を…………なんて、実の息子が目の前にいるのに、それもよくないような気がする…………。

結局何も思い浮かべることができなくて、物理的な快樂だけでいこうとする。

幸助くんは俺が説明した「白いの」が出るのを今か今かと待ち構えている。

だけどこれ……………ダメだな。こんなに見られていて射精できる気がしない。

「とまあ、こんなふうに～」

「白いのは？」

「いや、ちょっと今日は調子が…………」

その日の俺は、愛する妻の横で就寝したにも関わらず、幸助くんに啜えられた感触ばかり思い出して……その後も、布団の中で何度か出した……………。

朝は早起きして、幸助くんの尿検査のお手伝いだ。

尿検査の紙パックは昔よりも採取しやすい形になっていて安心した。

これなら何事もなくスムーズにできるだろう……………。

「あ……ちょっと恥ずかしい……………」

今朝は幸助くんがモジモジしている。

昨夜、風呂場でオナニー見られた時は俺の方がモジモジしていたのにな。

仕返しのつもりでニヤニヤと下半身を見つめる。

「男同士だぞ？ 何も恥ずかしがることなんてない」

「やっぱり自分でやる！」

「できるのか？」

「ウッ……」

「失敗して床ビチャビチャにしたら、お母さんに叱られるぞ～」

どうやら自信はないらしい。

かといってお母さんをお願いするのも恥ずかしいようだ。難しい年頃だもんな。

「ほらすぐ終わるから。ズボン下ろすぞ」

「うう～」

嫌がる男の子のズボンとパンツを引きずり下ろす自分に倒錯する。

いやこれは尿検査、尿検査だ。何もヨコシマな理由で脱がしているわけではない。

ピョコンと可愛らしく飛び出たおちんちんを観察する。

皮が剥けていない……少し持ち上げてやらないとだな。

ふにゅつとマシュマロのような感触に、またしても胸が高鳴り始めた。

たかが子どものチンチンだぞ、俺。何を動揺しているんだ。

誤魔化すように手早く採尿キットをあてがう。

もう出してもいいぞとアイコンタクトをした。

幸助くんが目を閉じて唇を引き結ぶ。……………出ない。

「やっぱり、お父さんの前でオシッコ出せないよ～～」

「ああ大丈夫、大丈夫……。目を閉じて、お父さんはいないと思い込むんだ」

「お父さんいない、お父さんいない……」

「そうだ、リラックスして～……」

サンプルはここまでです。

続きは製品版でお楽しみください。